

海外アカデミック・ディスカッション	
朝鮮戦争と日系人： 日系人コミュニティにおける元兵士の評価と現在の顕彰行為を中心として	
臺丸谷 美幸	ジェンダー学際研究専攻
期間	2009年10月15日～2009年11月19日
場所	アメリカ合衆国カリフォルニア州ロサンゼルス、サンフランシスコ他
研修交流 プログラム	UCLA アジア系アメリカ人研究科レーン・リョウ・ヒラバヤシ教授研究室および アジア系アメリカ人研究センター主催ワークショップ
施設	カリフォルニア大学ロサンゼルス校 (UCLA) アジア系アメリカ人研究科および アジア系アメリカ人研究センター

内容報告

報告者は修士論文から一貫して米国映画における朝鮮戦争像に迫り、文化表象から米国の朝鮮戦争の認識について考察してきた。昨年からは、朝鮮戦争記念碑設立などの現代における元兵士の顕彰行為把握のため、西海岸の日系人兵士を中心とした現地での聞き取り調査にも着手しており、博士論文では、表象分析とオーラル・ヒストリーと双方の手法を用いた米国の朝鮮戦争の記憶論を目指している。

朝鮮戦争は朝鮮半島の南北分断を決定づけた。ポスト冷戦と称される21世紀現在においてなお、朝鮮半島は、冷戦構造とその緊張関係が存続している。一方、米国国内では、朝鮮戦争は長らく「忘れられた戦争」と称され関心を払われてこなかった。それは日系人コミュニティにおいても同様である。第二次世界大戦における第442陸軍部隊や第100大隊の豊富な先行研究と比べ、朝鮮戦争に従軍した日系人兵士の研究は少ない【注1】。今回は元兵士に対するコミュニティ内の評価と元兵士が現在の顕彰行為に至る過程の理解を目標に掲げ、二つの課題を設定した。①西海岸の日系人元兵士において、彼ら自身やその家族の第二次世界大戦下の体験、特に強制収容所の体験が、いかに元兵士の従軍動機や朝鮮半島での戦争の語りに影響を与えているか。②コミュニティの評価は今日の元兵士の顕彰行為にいかなる影響をもたらしているかである。これらの課題は、博士論文では、六章立ての第三章と第四章の主要な議論である。第三章は戦争時当初からポスト冷戦期の現在に至るまでの日系人兵士像の変遷を追う。第四章は当事者である元兵士たちインタビュー分析を行い、第三章で分析したイメージ像と証言との乖離について論ずる。以下、活動記録である。

I. UCLA 主催ワークショップ参加と研究者との個人討論

まず文献討論会では、*Tragedy of Democracy* (2009)の著者グレック・ロビンソン教授【注2】と研究者によるパネルディスカッションが行われ、第二次世界大戦下の強制収容所研究に関する知識を深めることができた。次に女性学センター主催のセミナーでは【注3】、昨今のロサンゼルスにおける移民女性の地位について学び、女性学の研究者と意見交換を行うことができた。さらにアメラジージャーナル記念ワークショップで【注4】、現在米国におけるエスニック・スタディーズとジェンダー学の交差点における課題について知識を深めたことは、有益であった。上記以外にも個人面談を通して、UCLAの研究者と直接的に自己の博士論文構想について討論する機会があり、今後の論文執筆に結実させたいと考えている。

II. その他の学内外での研究活動

UCLAの学内図書館では、『パシフィック・シティズン』【注5】や、映画資料の視聴、資料収集を行った。学外では、全米日系人博物館【写真1】や、第二次世界大戦日系人兵士について実績を持つゴー・フォー・ブローク・情報センターを訪れスタッフとミーティングを実施し、各団体が所蔵する朝鮮戦争に関する資料の把握に努めた。さらに北部カリフォルニアの日系人兵士について把握するため、カリフォルニア大学バークレー校図書館を訪れた。さらに、日系人コミュニティ調査として、地元コミュニティイベント、たとえばサンフランシスコでは、第二次世界大戦の第442部隊に関するイベント【注6】に参加した。第二次世界大戦の日系人兵士についての知識を深め、関係者に取材を行うことができた。さらに、ロサンゼルス近郊在住の元兵士とのインタビューを実施した。質問では、彼らの従軍動機が第二次世界大戦下の家族の物語にいかに関係するかを調べ、

現在の再記憶化運動については、日米文化会館【注7】に隣接する全米日系アメリカ人兵士記念碑庭【注8】の朝鮮戦争記念碑についての建設運動の経緯について聞き取りを行った。【写真2, 3】

今後の研究計画

以上の成果は、博士論文完成を目指して、投稿論文や学会で口頭発表として公開していきたいと考えている。今回明らかになったことは、1950年当時の資料からは朝鮮戦争の従軍兵士も日系人の犠牲と忠誠の象徴としてその「功績」を称えられていたことである。ではなぜ朝鮮戦争の兵士イメージのみが時間の経過に従って消滅してしまったのか、その経緯の解明に力を注ぎたいと考えている。

なお、日本文化研究と本研究の関連について、示唆的な観点を得られたことを述べておく。日系人兵士は、日本が朝鮮戦争にいかに関与したかを間接／直接的に伝えるとして非常に注目すべき存在である。例えば、兵士の多くは、親たちが一世であり、日本語話者だったという家庭的背景から、派兵先の日本や朝鮮半島の人々とも日本語で会話した経験を持つ。日本語という言語を通して他の米国人兵士とは異なる体験をした彼らの証言は、文書資料のみでは把握しにくい朝鮮戦争当時の日本と朝鮮半島の人々の現状を知る上でも貴重な歴史資料となると言えるであろう。

謝辞 この紙面を借りて、アドバイザーを引き受け頂いた UCLA アジア系アメリカ人研究科レーン・リョウ・ヒラバヤシ教授、訪問実現に尽力下さったアジア系アメリカ人研究センター、ドン・T・ナカニシ教授、他職員の皆様方に深く感謝申し上げます。そして貴重な機会を与えて下さった大学院本プログラムの諸先生方、現地での様々な出来事にも快く相談に応じて下さり温かい励ましの言葉を下さった JCS 推進室の事務局の皆様にも改めて感謝申し上げます。

注

1. エドウィンナカソネ (1999, 2002) やトシオ・ウェルチエール (1999) ら元兵士の自伝的作品が多く、学術的先行研究は少ない。
2. カナダ、ケベック大学モントリオール校。
3. 「女性とロサンゼルスにおける移民女性の権利運動」
4. UCLA アジア系アメリカ人研究センター主催アメラジージャーナル記念ワークショップ「女性はどこで（自己を）語るか」。
5. 米国日系人市民協会 (The Japanese American Citizens League, JAACL) の機関紙である。
6. 「偏見と愛国心」プログラムシリーズオープニングレセプション。
7. The Japanese American Cultural & Community Center, JACCC
8. The Japanese American National War Memorial Court
日本語は報告者訳。



【写真1】最寄の地下鉄駅から望む全米日系博物館。2009年秋、メトロゴールド線リトルトーキョー・アート・アンド・デイズトリクト駅が開通した。(報告者撮影：2009年11月15日開通日当日)



【写真2】全米日系アメリカ人兵士記念碑庭の記念碑の一群。「日本に祖先をもつ」アメリカ人戦没者兵の名前が戦争ごとの記念碑に1995年以降毎年刻まれ続けている。(報告者撮影：2009年10月)



【写真3】日系人朝鮮戦争記念碑（1997年5月朝鮮戦争日系人退役軍人会建立）（報告者撮影：2009年10月）

だいまるや みゆき／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 ジェンダー学際研究専攻

【指導教員のコメント】

臺丸谷美幸さんは、昨年度「米国における朝鮮戦争の記憶の構築」の研究にあたり、イリノイ州での朝鮮戦争ナショナルミュージアム建設構想に関わる退役軍人、カリフォルニア州在住する日系の朝鮮戦争従軍兵士に対し、其々のインタビュー調査を行った。それ故、この段階でのインタビュー調査の分析視角の検討が必要な時に来ていた。今年度の「アカデミック・ディスカッション」により、UCLA 主催ワークショップ参加と研究者との個人討論を中心とした活動が出来たことは、論文作成に大変有意義な機会を得たと言える。米国の研究者とのディスカッションにより、第二次世界大戦下の強制収容所研究、今日の移民女性の地位研究や米国におけるエスニック・スタディーズとジェンダー学の交差点における課題についての知識を深めたことは、大いに意義があった。

同時に、雑誌や映画資料、全米日系人博物館等での第二次世界大戦日系人兵士や朝鮮戦争に関する資料、北部カリフォルニアの日系人兵士の資料等の収集についても、充実した成果が得られた。さらに、ロサンゼルス近郊在住の元兵士へのインタビュー調査を実施できたことは大きな収穫であった。特に、1950年当時の資料では、朝鮮戦争の従軍兵士も日系人の犠牲と忠誠の象徴としてその「功績」を称えられていたが、その後朝鮮戦争の兵士イメージのみが消滅した事の再確認は、博論の構想に大きな示唆を与えたと言える。

(お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 教授 館 かおる)